■フォト・エッセイ■

# インド亜大陸 最南端カニャクマリに沈む夕陽

写真・文　坂井華奈子

椰子の木とバナナの木が続く風景

マンゴー売りの露店。炎天下で行列していると、シャルダーが買ってきて「暑いときにはこの青いマンゴーに塩をつけたのがいいのよ」と分けてくれた。確かに汗をかいた体は塩分を欲していた

フェリー乗り場へ続く行列。さらに角を曲がっても続いている。インドではこの時期は夏休みに当たるため家族連れが多く、故郷を遠く離れた二人は家族を恋しく思ったようだった

インドには「カシミールからカニャクマリまで」という言い回しがある。日本での「北は北海道から南は沖縄まで」に相当するが、インドでは土地が変わると言葉さえ通じないこともある。ある映画の主題歌では「僕はカシミール、君はカニャクマリ」という歌詞で二人の違いの極端さが表されているそうだ。

また、カニャクマリにはその名にまつわる悲しい伝説がある。シヴァ神に恋をしてついに結婚することになった女神カニャクマリは、結婚に縁起のよい時刻として指定された真夜中に彼が岬に迎えに来るのを待っていた。そのとき、未婚の処女にしか倒せない悪魔が暴れて困っていた聖者はこの結婚を邪魔しようと画策した。岬に向かう途中、騙されて夜が明けないうちに鶏の鳴き声を聞かされたシヴァ神は遅すぎたと思い込み諦めて帰ってしまった。かくして傷心の女神によって悪魔は退治されたものの、今尚彼女は未婚のままというものである。

ひょんなことから、そんな伝説のある土地に足を踏み入れることになった。ケーララ州の州都ティルヴァナンタプラムを訪れたときのこと。デリーからムンバイを経由し飛行機で約五時間。空港から椰子の木の続く風景を眺めながら宿泊先の研究所に到着すると、先生が夕食に誘ってくれた。ヒンディー語を習っているが、ケーララ州の公用語はマラヤーラム語である。看板を眺めながら文字が読めないことを嘆くと「私も読めないよ。タミル・ナードゥの出身だから」といわれ驚いた。このあたりではタミル語も通じるらしい。

調査を開始して早々、その週の金曜は州の定

フェリーで配られる救命胴衣の装着方法の説明書。多言語表示

岬と二つの小島を往復するフェリー。
船内は各地から巡礼に訪れたインド人でぎゅうぎゅうだった

ヴィヴェーカナンダの記念像がある建物

ヴィヴェーカナンダ岩の通路。インドの寺院や聖地でよくあるように、ここでは靴を脱いで裸足になる。日差しで熱せられた地面は裸足で歩くにはつらいが、白くペイントされた通路は熱をはじいて歩きやすくなっていた

める休日のため訪問予定の官庁、図書館や書店は開いていないことがわかった。予定を組み直し車の手配などを相談すると、どうせ行くところがないならばカニャクマリで夕陽をみてきたらどうかと提案された。

海から日が昇りまた海に沈んでいくインド亜大陸最南端の岬カニャクマリは、アラビア海、インド洋、ベンガル湾の三つの海がひとつに交わる地点であり、ヒンドゥー教の聖地としても人気がある。ガンジーの遺灰の一部もそこから海に流されたそうである。現在のカニャクマリ地区はティルヴァナンタプラムと同じくかつてのトラヴァンコール藩王国の一部だった。そのためケーララ州に属していたこともあったが、タミル語話者が多いため何度かの再編成を経てタミル・ナードゥ州に統合された。聞けば車で日帰りできる距離とのこと。せっかくの機会なので行ってみることにした。

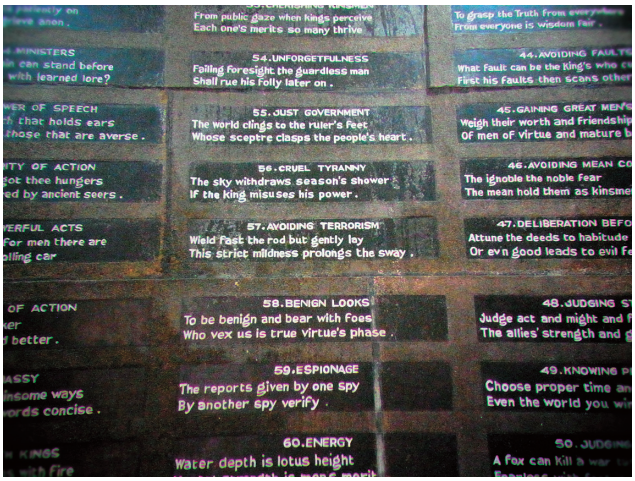
私ひとりでは車に空席がある。旅は道連れということで先生が学生二人をお供につけてくれた。ひとりはデリー出身のシャルダー。彼女はカニャクマリには一度行ったことがあるが日没はみていないという。もうひとりはオディシャ出身のマドゥ。彼は初めてのカニャクマリに胸を躍らせているようだった。二人とも州外出身のため現地語は話せず、運転手とは片言の英語とヒンディー、そしてお互いの想像力を駆使してコミュニケーションすることに。

朝一〇時過ぎに宿舎を出発し、バナナと椰子の林を横目に進むこと四五分。「この辺は手織りの布が名産だから買っていかない？」と誘われ、以前彼らが手織り産業に関する調査で訪問

足元から見上げると大きすぎて全体像がわからない。
高さ 95 フィート、台座 38 フィートという数字は
それぞれ箴言詩集中の代表的な詩の番号を表しているらしい

二つ目の小島に立つティルヴァッルヴァル像。
足元にいる人の大きさからその巨大さを察してほしい

名産の手織りの布を見せてもらっているところ。
店の並ぶ通りを一歩奥に入ると布を織る様子を
みることができるそうである




建物の内部の壁には一面に箴言詩「ティルックラル」が。
これは英訳版だが、日本語訳も出版されている

女神の足跡がある建物の入り口を守るライオン像。建物内は撮影禁止

したことがあるという地区で車を止めた。一軒目でマドゥは手拭いを購入していたが、値引き率が悪かったので女子だけで二軒目へ。品物をみていると、店主の父親と思しき老人がやってきてタミルかマラヤーラムは話せないのか？と（おそらく）聞かれた。英語かヒンディーだけだ、というと「マイプロダクト！シー！クオリティ！」と片言の英単語を駆使しながら売り込んでくる。しかし、シャルダーも負けじとヒンディーで値切る。お互いに違う言葉を話していてもまったく動じない姿勢はすがすがしいほどだった。

寄り道から戻りさらに車を走らせること二時間半。目的地へ到着するとすでに昼食時を過ぎていた。目に付いた海のみえる食堂に入ると北インド料理の店で店員もヒンディー語を話す。この土地の名物を食べるべきかと思ったが、いつも宿舎で南インド料理を食べている二人が懐かしいメニューを見て喜んでいたため、目をつぶることにした。

食事を終えて外に出ると、フェリー乗り場へ長い列ができていた。切符の販売は四時で締め切られるそうで、列の長さをみるとぎりぎりというところだった。やっと列の先端がみえてきた頃シャルダーにお姉さんから電話が入り、アンダマン・ニコバルあたりで地震があったから海で遊ぶなら気をつけなさいとのこと。ネパールで大きな地震があった記憶も新しく、また、このあたりはインド洋大津波の被災地でもあった。揺れは感じなかったが津波が来たらと思うと躊躇した。念のためウェブで確認すると津波の心配はないと出ていた。覚悟を決めて乗船す

さかい　かなこ　アジア経済研究所　在デリー海外派遣員
ライブラリアン。2014年3月からインドで政府情報の流通とアクセスに関する調査を行っている。

サンセットポイントで臨む夕陽。残念ながらこの後水平線の雲に隠れていった

海に沈む夕陽を見送りつつ、振り返ると向かい合うように東の空には月が昇っていた

三つの海が交わる地点では海水の色が違うといわれたが、水深のせいではないのだろうか……？

ることに。

フェリーはまずヴィヴェーカナンダ岩と呼ばれる小島に着いた。ここには宗教家のヴィヴェーカナンダが三日間瞑想を行ったことを記念する像がある。瞑想室ではインドで聖なる音とされる「オーム」という音が絶え間なく流れ、椅子が並べられた暗い室内の前方には緑色の明かりで「オーム」の文字が浮かび上がっていた。島の後方には女神の足跡が祀られている建物もあり、ガラスに囲われた岩の上の足跡には生花が供えられていた。マドゥは記念撮影をしたがっていたがいずれも館内は撮影禁止のため残念ながら写真はない。

再度フェリーに乗り次の小島へ移動すると、そこにはひときわ目を引く巨大な像がそびえている。タミルの詩人・思想家ティルヴァッルヴァルの像である。「ティルックラル」という法・財・愛をテーマにしたタミルの箴言詩集を著したそうだ。

像に圧倒されながら島を去ると日没の時間が近づいていた。沐浴場、寺院や博物館などほかにも見所はあるが、この旅の使命は夕陽をみることである。急いでサンセットポイントと呼ばれる場所へ移動し、大勢の人々とともに日の入りを待つ。刻一刻と沈む太陽を眺めていると、日没の時刻に差し掛かる頃水平線のあたりに雲が出てきた。雲に遮られ絵に描いたようなそれではなかったが、聖なる土地でみた夕焼けはそれでも特別に感じられた。日の出や日没を神聖視する文化は初日の出を拝む日本人には身近に思えた。いつの日かここで日の出をみながら海で沐浴するために、再訪を心に誓った。